

変化を示す「なる」と「する」の統語・意味的な使用の検討

— 日本語学習者の誤り表現の分析 —

An investigation of *naru* and *suru* syntactic/semantic ‘change’ usages:
Analysis of errors created by learners of Japanese as a foreign language

張 婧禕[†]
Jingyi Zhang

Abstract *Naru* and *suru* syntactic/semantic usages expressing ‘change’ are difficult for learners of Japanese as a foreign language (JFL), even at the advanced level (Iori, Takanashi, Nakanishi and Yamada, 2000). Thus, the present study investigated *naru* and *suru* mistakes created by JFL learners. The error analysis indicated that JFL learners’ mistakes are fundamentally caused by confusing the contrastive nature of *naru* as a transitive and *suru* as intransitive, especially applying them for expressions of tense and aspect.

1. はじめに

自動詞の「なる」と他動詞の「する」は、両者共に変化を表す一対の動詞として使われ、この両者の対応関係は自・他動詞の対応と似ている（庵・高梨・中西・山田 2001）。そのため、「なる」は、自動詞であり、ある状態・動作に達成する「変化の過程」を表す。それに対して、「する」は他動詞であり、意識的な働きかけによって、状態変化の達成を表す（市川 2010；庵・高梨・中西・山田 2000）。日本語学習の初心者にとっては、習得段階において、「なる」と「する」の使用方法を明示して区別することで、両者の混用を回避できよう。しかし、日本語能力の中・上級でも、変化を表す表現である「なる」および「する」をアスペクトまたはテンスと組み合わせられて表現しようとする、統語・意味的な用法がよく理解できていないようで、誤りがみられる。たとえば、以下のような例がある（「*」は特定な文脈が必要となる文を表す）。

(1a) *現在、地球は暖かくなるのは深刻な環境問題である。

(1b) 現在、地球は暖かくなっているのは深刻な環境

問題である。

ここで、すでに発生した出来事に対して、例文（1b）の表現は（1a）よりも自然な日本語とされる。つまり、「なる」をテイル形にしたほうが、より自然な文と容認されるようである。

(2a) *私は毎日朝ごはんを食べるようにした。

のように、過去形を使った例文（2a）は、やや不自然な日本語である。しかし、

(2b) 私は毎日朝ごはんを食べるようにする。

と「する」を基本形にすると、自然な表現になる。これは、「毎日」という恒常性を表す時間名詞があるため、行う動作は慣習的な活動として、タ形と共起するのは不自然であるからだと考えられる。これらの誤用は、いずれも「なる」と「する」を間違って混用することではなく、アスペクト・テンスを伴う「なる」と「する」の意味用法と関わっている。そのため、日本語能力の低い学習者にとって、これらの微妙な違いを正しく理解して、産出するのはかなり難しい。

そこで、本稿では、変化を表す「なる」および「する」

[†] 愛知工業大学 基礎教育センター・非常勤講師

についての用法解釈のまとめについて確認するために、庵・高梨・中西・山田 (2000)『初級を教える人のための日本語文法のハンドブック』および市川 (2010)『日本語誤用辞典』の中に使用された誤用例、または、その他の例文を抜粋した代表的な例文(すべては肯定表現であり、否定表現は別途)を用いて、基本的用法から拡張的用法まで分析した。さらに、「なる」と「する」はアスペクト・テンスと結びつけて、どのように解釈すればよいか、その文法的捉え方について、例文を通して説明する。

2. 「なる」および「する」についての用法

2・1 変化を表す自動詞表現「なる」と他動詞表現「する」

初級レベルの日本語教育現場において、変化を表す「なる」と「する」は基本的な用法から学習者に教えられるのが一般である。つまり、名詞、形容詞、ナ形容詞(以下、形容動詞)と結合する表現である。それらは基本的な用法であるものの、初期の学習段階の誤用としては、以下のような例が挙げられる。ここで、正用および誤用の例文を通して、「なる」と「する」についての基本用法を図式化して、理解を深める必要があると考えられる(aは正用、bは誤用、「??」は非文であることを表す)。

- (3a) ??田中さんは息子さんを医者になった。
- (3b) 田中さんは息子さんを医者にした。
- (4a) ??息子は4月から小学生にした。
- (4b) 息子は4月から小学生になった。
- (5a) ??部屋をきれいになってください。
- (5b) 部屋をきれいにしてください。
- (6a) ??この大学は去年から入学試験を難しくなった。
- (6b) この大学は去年から入学試験を難しくした。
- (7a) ??日本語の中で漢字が嫌いですが、だんだん、好きです。
- (7b) 日本語の中で漢字が嫌いですが、だんだん、好きになった。
- (8a) ??一週間も会社を休んだもので、もう会社に行きたくないようになってしまった。
- (8b) 一週間も会社を休んだもので、もう会社に行きたくなくなりました。

まずは、上記の(3a)から(8b)までの例文から、変化を表す「なる」と「する」に関する基本意味的用法の区別が、以下のように説明できよう。

例文(4b)の「小学生になった」、(7b)の「好きになった」および(8b)の「行きたくなくなりました」

のように、変化を表す「なる」は、名詞、形容詞、形容動詞の後に来る。そこで、文における主語の属性・性質が「小学生ではない」、「好きではない」、「行きたい」という状態から「小学生である」、「好きである」、「行きたくない」という状態に自然に変化することを意味する。つまり、「なる」という自動詞表現は2項動詞として、「YがZ(に)なる」の形式で、外部による力を使わず、主語の無意志的に変化するという意味を表す。そもそも主語自体の変化についての記述である。それを図に描くと、図1のようになる。

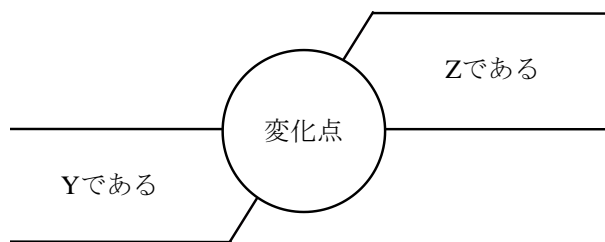


図1 「なる」による「変化」

一方、正用の例文(3b)の「(主語が/は)息子さんを医者にした」、(5b)「(主語が/は)部屋を綺麗にした」および(6b)の「(主語が/は)入学試験を難しくした」のように、必ず文における主語が必要となり、その主語が意志的な働きをかけて、目的語である「息子」、「部屋」、「入学試験」の属性を「医者ではない」、「綺麗ではない」、「難しい」ということから「医者である」、「綺麗である」、「難しい」ということへと変化させる意味が裏付けられている。つまり、「する」は「他動詞表現」で3動詞として、「XがYをZ(に)する」の形式で、また、主語の意志的な変化を意味すると考えられる。言い換えれば、動作主は動作対象に働きかけ、動作対象はその働きかけによって変化されると考えてもいい。それについては、図2のように示される。

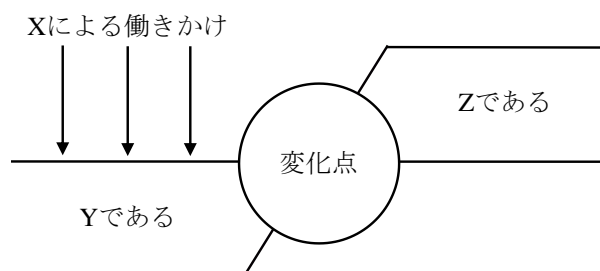


図2 「する」による「変化」

変化を示す「なる」と「する」の統語・意味的な使用の検討
 ー日本語学習者の誤り表現の分析ー

以上のように、「なる」と「する」は品詞の名詞、形容詞および形容動詞の後に直接結びつけ、具象的な「変化」を表す。このような場合、基本用法としては、「なる」は2項動詞の自動詞であり、主語の無意志的变化を表すことに對し、「する」は3項動詞の他動詞であり、動作主役としての主語が必要とされ、その動作主である主語からの働きかけによって動作の対象である目的語が変化するという意味を強調することが明らかにされた。さらに、これから、意味用法は状態の変化から動作の変化へ拡張し、動詞との結びつけを考察する。

2・2 拡張的意味を表す自動詞表現「なる」と他動詞表現「する」

2・2・1 「動詞基本形＋ようになる」および「動詞基本形＋ようにする」

「なる」または「する」は動詞と共に起する場合、「動詞の基本形＋ようになる」または「動詞の基本形＋ようにする」という構造で表現される。たとえば、以下の例文がある。

- (9a) ??油をさしたら、ドアがスムーズに開くようにした。
 (9b) 油をさしたら、ドアがスムーズに開くようになった。
 (10a) *私は毎朝ジョギングするようになった。
 (10b) 私は毎朝ジョギングするようになった。
 (11a) ??車が増えたために、交通事故が多発した。
 (11b) 車が増えたために、交通事故が多発するようになった。
 (12a) *腹を立てないようになると、もう一つのポイントは、「現状に感謝すること」です。
 (12b) 腹を立てないようにする、もう一つのポイントは、「現状に感謝すること」です。

動作変化を表す例文(9b)と(11b)の主語は無情物の「ドア」、「交通事故」であるため、主語による意志的な働きを表せないため、「ようにする」を使うと非文になる。一方、例文(10a)、(10b)、(12a)と(12b)はいずれも非文とはいえない。(10b)の「ジョギングする」および(12b)の「感謝する」の主語は有情物であるものの、「ようになると」という変化表現を用いて、主語による意識的な動作を表さずに自然にそういう動作が行われた直後に起こる事態、または繰り返すことができる慣習的な出状態に至った意味を表すと考えられる。それは本来の動詞の「なる」から「自動詞」の性質をもたらすので、

「自動詞」に近いのだろう。

さらに、(10a)、(10b)、(12a)と(12b)では、「ようになる」にしたほうが良いのか、あるいは「ようにする」のほうが良いのか、それぞれ解釈が異なる。たとえば、(12a)の「ようになると」で表現すると、「腹を立てない」という無意志的な出来事が成立させるため、習慣的にある行為を行うことを意味することになる。しかし、(12b)の「ようにする」で表すと、「腹を立てない」という意志的な出来事であるため、主語による働きかけがあるというニュアンスが裏付けられる。そこで、後半の文脈から考えれば、主語による働きかけがあり、「腹を立つ」という出来事を意志的に行わない」と解釈できるため、(12b)の「ようにする」のほうがより自然な表現に近いと思われる。その意味使用は「他動詞」の性質に近い。

「自動詞」と「他動詞」の観点から両者に関する考察は池上(2002)に行われている。池上(2002)は、非状態性の動詞は「～ようになると」の前に来る場合、同様、または類似した事態の複数回の発生による習慣・繰り返しの定着を表すと指摘している。まさか、ここで挙げた例文の(9b)、(10b)および(11b)に含まれる「開く」「食べる」「多発する」は動作性が強い動詞であり、習慣・繰り返しの定着というニュアンスを表すといえよう。

2・2・2 「動詞基本形＋ことにする」および「動詞基本形＋ことになる」

さらに拡張して考えてみると、「なる」と「する」を使って、純粋な変化を表すという中心義ではなく、その拡張意味の一つとして、決定を表す場合もある。それは、ある決定事項によって、もたらされた変化を意味すると考えてもよい。たとえば、以下の例文(13a)と(13b)が挙げられる。

- (13a) *来月出張のためパリに行くことにしました。
 (13b) 来月出張でパリに行くことになりました。

ここでは、出張命令を受けて赴任する意味を表す文として、(13a)より(13b)のほうが適切だといえよう。(13a)の「ことにする」では、話し手がある出来事を話し手の自分の意志で決めることを意味する。しかし、「出張」という前提条件では、出来事の「パリに行く」が自分の意志で決定することができない。ある特定な言語環境が設定されておらず、論理的に通じないため、「ことにする」はここで使うのは相応しくないとと思われる。しかし、(13b)の「ことになる」を用いて、表現すると、ある出来事が外的な要因によって決定したことを表すことができるので、出張命令を受けて赴任する場合に使われる。

一方、その文法規則に従わないが、日常生活において固定的な表現としてよく使われている例もある。たとえば、以下のような例である。

(14a) ??今度、〇〇さんと結婚することにしました。

(14b) 今度、〇〇さんと結婚することになりました。

例文 (14a) は必ず間違いとはいえない。「結婚」という行為は自分の意志で決定する。ただし、自動詞の「なる」を使って表すと、日本語としての習慣的な使用に相応しく、より容認度が高まるだろう。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス少納言』(BCCWJ, http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search_form) で、日常生活における「結婚」と「ことにする」または「ことになる」との共起関係について検索してみた。すると、「結婚することになる」で表現されるのは 80 件で、その内訳は、「結婚することになる」が 10 件、「結婚することになった」が 30 件、「結婚することになって」が 12 件、「結婚することになりました」が 28 件であった。これに対し、「結婚ことにする」で表現されたのはわずか 5 件であった。これは、80 件対 5 件なので、統計的に検証するまでもなく、有意な違いがあると思われるが、念のために分析すると、カイ二乗の一様性の検定で、有意であった [$\chi^2(1)=85.00, p<.001$]。つまり、「結婚」という特定の行為について、特別な文脈がなければ、「する」より「なる」のほうがより頻繁に使用されている。これは、日本語の言語文化的側面を反映した特別な例であろう。

以上の例文を通して、やはり、「ことになる」と「ことにする」は決定事項による変化という拡張的な意味を表しても、後に来る「なる」と「する」の痕跡が残り、「ことになる」には自動的な表現、「ことにする」には他動的な表現という意味的特徴が付与されているといえよう。

3. テンス・アスペクトにおける「なる」および「する」の意味用法

「なる」と「する」は動詞であり、テンスとアスペクトに関わる表現は以下の例文がある。

(15a) *油をさしたら、ドアがスムーズに開くようになっていた。

(9b) 油をさしたら、ドアがスムーズに開くようになった。

(16a) *私毎朝朝食を食べるようにした／ようにしている／ようになっている。

(16b) 私は毎朝朝食を食べるようになった。

(17a) *こちらのシャツは 200 円にします／なりまして／しました／なっています／しています。

(17b) こちらのシャツは 200 円になります。

例文 (15a)、(9b)、(16a)、(16b)、(17a) および (17b) におけるテンスとアスペクトの使い方を見てみると、どちらもいえないことはないが、特定の場面、あるいは、文脈があれば、解釈できようになるとされる。たとえば、例文の (16a) では、「私は毎朝朝食を食べるようにした」の表す意味と、「私は毎朝朝食を食べるようにしていた」の表す意味がほぼ同様だと指摘している (松岡 2000)。なぜなら、前節にも述べたように、「する」と動詞を結びつく場合では、習慣を表す用法があるので、テンスの「タ形」だけだと過去の習慣を表し、テンスの「タ形」とアスペクトの進行形「ている」では過去の長時間守っていた習慣、おそらく、現在そういう習慣ではない状態であると表す。特定の文脈においては、両者は置き換えられると考えられる。

しかし、それに対して、例文 (15a) の場合では、「油をさして、ドアがスムーズに開くようになっていた」の場合、「なる」と「ていた」と結びつけ、過去の状態変化の結果の持続を表すため、反復できずまた一次的な出来事であるため、「油をさして、ドアがスムーズに開くようになっていた」のような表現が使えないと思われる。

さらに、例文 (17a) におけるテンスおよびアスペクトの接続を考えてみると、変化を表す自動詞表現である「なる」と「ている」をくっつけて、「こちらのシャツは 200 円になっています」は「今、2000 円という割引」を行い、またその結果の状態を表す場合に使われる。それに対し、「こちらのシャツは 200 円にしています。」では、動作動詞 (他動詞表現である「する」) と「ている」とくっつけて、「動作の進行」を表すため、「2000 円シャツの値引きキャンペーンを実行中」しか解釈できない。

もちろん、テンスとアスペクトは、複雑な文法システムであり、それぞれ単独なものとして考えることだけでなく、両者には密接な関係もある。たとえば、未来と未完了、現在と進行中 (継続)、過去と完了 (継続) は平行し同等とされている。ここでは、恒常・慣習・繰り返しの定着の意味を表すため、「ル」形は単文の例文としてより相応しいと考えられる。

以上のように、日本語は「出来事の全体」を捉えて、テンスとアスペクトを併用して出来事の発生時間および進行段階を表現する。つまり、出来事の成り行きという点から「なる」「する」におけるアスペクト・テンスの解釈ができるといえよう。

変化を示す「なる」と「する」の統語・意味的な使用の検討
 ー日本語学習者の誤り表現の分析ー

4. まとめ

本稿は、例文分析を通して、変化を表す「なる」と「する」の意味用法を基本義から拡張義まで検討した。また、アスペクト・テンスにおける変化の意味を表す日本語の「なる」および「する」の意味使用について、以下のようによまとめられよう。

第1に、「なる」と「する」は体言（名詞、形容詞、形容動詞）の後に来る場合、具象的な状態変化を表し、最も基本的な意味用法である。「なる」は主語の無意志的变化とし、「する」は主語からの働きかけによる変化とされる。もちろん、ここでの主語は動作主であるため、有生名詞でなくてはならない。「なる」と「する」は用言（動詞）の後に来る場合、動作変化へ拡張したが、「なる」と「する」における意味的特徴の一貫性を保つため、拡張的な意味に使われても、「～なる」は自動的な表現であり、「～する」は他動的な表現であることは変わらない。ただし、本稿では、この規則を逸脱して例外として(14b)の「今度、〇〇さんと結婚することになりました。」も挙げた。

ここで、池上(1982)は、変化を表す代表的な表現とする「する」と「なる」は言語表現の類型に関わる表現であると指摘している。さらに、日本語を英語などと比較し、日本語は『なる』型言語であり、英語などは『する』型言語であると主張した。簡潔にいうと、『なる』型言語では、動作主を表に出さない表現を好む傾向がある。つまり、自動詞を使う傾向が高い。それに対し、『する』型言語では、動作主を中心に出来事を描くのを好む傾向がある特徴を持つ言語であり、他動詞を使う傾向が高いと考えられる。

しかし、18年分の毎日新聞記事コーパスにおける36対自他動詞の使用頻度を比較した実証研究では、自他動詞の使用頻度における差異は有意に見られなかった(玉岡・張・牧岡 2018)。そのため、以上の先行研究に踏まえて、「なる」と「する」に関する例文(14)は「なる言語」または「する言語」のような言語類型上の違いとは言いにくく、むしろ「結婚」などのような特別な動詞の場合、決定に伴う変化の表現と結びつけると、言語活動の一環として、話し手は発話時の発話環境に相応しい表現式を選択したと解釈してもよいだろう。

第2に、「なる」および「する」は単独な項目のみとし

て考えることではないが、それぞれテンスとアスペクトと互いに絡み合い、表現する場合もある。便宜上、以下のようにそれぞれまとめる。

テンスからいえば、動作性が強い動詞である「する」は「ル形」で表す場合、未来を表し、「テイル」形で表す場合、現在の状態を表す。それに対して、状態性が強い動詞である「なる」は「ル形」で表す場合では、現在を表す。未来を表す場合では、未来を表す時間名詞が同時に現れる。

一方、アスペクトからいえば、「タ形」は基本的に、過去のことであり、現在と直接関係ないが、性質や状態は今や現在と関係があれば、今や現在も続いていれば、「ル形」と「タ形」は両方とも使える。また、動作や出来事が完了したことも表す。

ここで、本稿は理論面で日本語の「なる」と「する」におけるテンス・アスペクトの用法解釈を考察したが、学習者による理解を実証的に検討していない。今後の課題として、学習者による理解を検証し、アスペクト・テンスに関する習得・教授に示唆を与える。

【参考文献】

- 池上嘉彦(1982)「第二章 表現構造の比較—『スル』的な言語と『ナル』的な言語—」『日英語比較講座第四巻発想と表現』国広哲彌(編), 67-110, 大修館書店。
- 池上素子(2002)『『～ようにする』の意味特徴—『～ようになる』『～に/くする』との比較から—』『北海道大学留学生センター紀要』6, 1-20.
- 市川保子編著(2010)『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク。
- 影山太郎(2011)『ケジメのない日本語』岩波書店。
- 玉岡賀津雄・張婧禕・牧岡省吾(2018)「日本語自他対応動詞 36 対の使用頻度の比較」『計量国語学』31, 443-460.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(著)(2000)『初級を教える人のための日本語文法のハンドブック』松岡弘(監修)スリーエーネットワーク。
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(著)(2001)『中上級を教える人のための日本語文法のハンドブック』白川博之(監修)スリーエーネットワーク。

(受理 平成31年3月9日)